

畝立同時施肥技術によるキャベツ産地の拡大を目指して

高齢化の進む西播磨のキャベツ産地においては、生産面積が年々減少している。そこで、JA兵庫西キャベツ部会赤佐支部が畝立同時施肥技術の実証に取り組み、収量は同等以上で作業が省力化できる技術であることを証明した。今後はこの技術を導入し、産地の拡大と活性化を図る。

1 高齢化の進む西播磨のキャベツ産地

JA兵庫西キャベツ部会赤佐支部（部会員11戸、栽培面積1.46ha：以下赤佐支部）は西播磨におけるキャベツ生産を担っている。部会員の多くが土地利用型作物生産農家であり、輪作作物として、また冬期の土地の有効利用を目的にキャベツの栽培が定着してきた。しかし、部会員のほとんどが65歳以上であり、重量野菜であるキャベツの生産面積は年々減少していた。

2 畝立同時施肥技術の実証に取り組み

普及センターは、省力化技術の導入がキャベツ生産に必要と考え、赤佐支部と2014、2015年度に産地ブランド発掘事業を活用し、赤穂市において畝立同時施肥技術の現地実証に取り組んでいる（写真）。



写真 畝立同時施肥機の実演

現地の圃場は砂壤土で、基肥窒素成分が28.8kg/10a（すべて化学窒素成分）と多いことが課題であった。そこで2014年度には、畝立同時施肥技術（表層施肥）により約10%の基肥窒素量を削減した。2015年度は表層施肥と全層施肥の2つの技術を併用するとともに、有機質肥料を活用し基肥の化学窒素成分量を57%まで削減した。2014年度の収穫調査結果では、実証区が慣行区より全重、結球重ともに優れ、大半が3L以上の大玉となった。

畝立同時施肥技術の導入は、本田準備から定植までの作業が一工程で行え、降雨等の影響を受けやすい定植時期にタイミングよく作業できる。また、施肥量を削減しても同等以上の収量が得られることや畝間の肥料を削減できることに加え、雑草発生量や病害虫の発生も少なかった。

3 今後の課題

この結果を受けて、畝立同時施肥技術の導入によってキャベツの生産を安定させ、産地の拡大を進めていきたい。また、個々の大規模化が進まない当地域においては、県食品認証の取得を目指し、安全・安心な食材として地域内の量販店への販売や業務用として学校給食への供給体制づくりを進め、産地を活性化させたい。

加納 卓也（光都農業改良普及センター）
（問い合わせ先 電話：0791-58-2211）